

[学術資料]

保健体育教師の早期離職プロセスに関する一考察

銘苺 淳¹⁾・松木 優也²⁾・石原 一成³⁾

I. 緒言

1. 研究テーマの設定

我が国において教師という職に就くには、一般的に教職課程のある大学等に進学または所属し、必要な単位を収め、教員免許を取得することが必須である。そして各自治体の定める教員採用試験に合格をして初めて教師という職に正式に就くことができる。文部科学省（2020）の統計によると、公立学校の教員採用試験の倍率は平成12年をピークに近年減少傾向にあるが、受験者数はほぼ横ばいであり、教科や校種、自治体によっては30倍を超えるため、依然として低いとは言えない。このように現在も一定の希望者数があることから教師という職には魅力があると言える。しかしながら、採用試験に合格し、教師となったとしても早期離職する者は一定数存在する（JTB Benefit, online）。そこで本研究では早期離職者が離職を考え、決意し、実際に離職するまでのプロセスを明らかにしたいと考えた。

2. 研究の意義・必要性・重要性

新井（2007）によれば、教師という仕事は同じことをしても同じような教育効果を保証することができない不確実性の高い仕事である。そのため、教師自身が自ら成長を求めキャリア育成していくことが必須であるが、早期離職をしてしまうとキャリア育成の半ばで教師を辞めることになってしまう。経験を持った教師が教育現場を離れてしまうことは人材の喪失となり、教育の質が上がらない原因となる。現代社会における社会の価値観の変化や学校教育に対する教員としての関わり方など様々な要因がある中で、若手教師の育成とサポートを充実させること、そして離職を止めることは人材の流出を防ぐことと教育の質向上の観点からも急務である（迫田ほか、2011；脇本ほか、2015）。

キーワード：早期離職、教師像の変容、発想転換型

受付日 2021.06.29

受理日 2021.12.23

所属 1) 関西学院大学男子ハンドボール部、2) 京都先端科学大学健康医療学部健康スポーツ学科
3) 福井県立大学学術教養センター

本研究において心境の変化などを含めた早期離職に至るプロセスを一つの事例として提示することができれば、人材喪失を防ぐ一助、さらには教員養成課程において教師の実態をより正しく伝え適切な進路選択の一助となりうる。

3. 既存研究の内容

文部科学省（2020）の統計によると、令和元年度の公立学校教員の病気休職者及び1か月以上の病気休暇取得者の数は1万8千人を超えるがその半数以上の9642人が精神疾患を伴う休職になっている。とりわけ20歳代の病気休職者のうち約90%が精神疾患によるもので、日々の職務が心身に与える負担は大きいことが予想される。小橋（2012a）は小中学校教諭におけるストレスとバーンアウトなどメンタルヘルスに関する離職については相関があるとしている。

本来は共働体として学校や職員全体で教育活動を行なっていくことが理想ではあるが、脇本（2015）が教師の年齢構造の変化や多忙化で相談しにくく、失敗が許されないような環境になっていることをあげており、教師の心身の負担を大きくさせる要因の1つだと推測される。休職や離職に関して小橋（2012b）は離職意思と離職の要因に関する検討を行っており、草海（2014）は「対教師ストレス」「保護者ストレス」「同僚ストレス」「校務ストレス」が促進要因になっているとし、約40%の小中学校の教師が日頃から休職や離職をしたいと考えていると報告している。また質的、量的な仕事量の多さからも責任の個人化が進み、「個業」として「弧業」と化していく実態がある。これは「ミスの許されないサービスの献身傾向」となり長時間勤務や心身の疲弊につながっていると考えられる。このことから離職を決意する要因として何らかのストレスや多忙による影響が考えられる。

平尾（2020）が教員の疲弊構造に関するインタビュー調査の中で「自らの目指す教師像の縛りに由り、教員は個人に課せられた仕事容量を超えてますます疲弊している」と述べていることから、教師として職務を行なっていくうえで教師自身がつもつそれぞれの教師像の存在が時として疲弊につながることを示唆している。また、教師の職務における疲労蓄積型の休職や離職ではなく「教師という職業にとらわれず、別の世界で生きてみるのもよいのではと考えることがある」や「教師以外の仕事をしたいと思うことがある」などの「発想転換型」（草海、2014）の休職や離職理由が一定数あることも事実であり、その傾向は男性教師との関連が強いことがわかっている（平尾、2020）。

須甲・四方田（2013）は「授業者としての教師観よりも運動部活動指導者としての教師観を有する体育教師のほうが多い可能性は高い」と述べている。そのような教師観は「生徒として、運動部活動指導者としての教師観を有した体育教師に指導を受けた場合、その生徒が体育教師になると、自身が指導を受けてきた体育教師と同じように運動部活動指導者としての教師観を有したまま教育実践を行なっていく可能性」から生まれるものだとしている。

運動部活動の指導がしくて教師を目指した場合、実際の職務を遂行していく過程で、本来やりたかった運動部活動の指導が十分にできないという現実におつかる可能性がある。運動部活動指導者としての教師像を持っていたときと実際の学校現場では教師の中で教師像の変化につながり、教師という仕事に対するモチベーションの変動につながると考えられる。

平尾（2020）が多忙やストレスが原因で離職した小学校中学校での教職経験のある女性三人に対してインタビュー調査を行なっている例はあるが「発想転換型」の男性の例はない。

4. 目的

そこで本研究では、実際に保健体育教師の運動部活動指導者としての側面を強く思い描き教職に就いたが、早期に離職してしまった事例をもとに半構造化インタビューを行ない、早期離職までのプロセスについて明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. 対象者

本研究の対象者は、20XX年4月の着任から20XX+3年3月に離職するまで、3年間の高等学校保健体育教師として勤務経験のあるN氏である。N氏を本研究の対象者として選定した理由は2点ある。1点はN氏がC大学教育学部の出身であり、卒業後の進路に関して教員を志望していたことである。なお、N氏は大学4年次に受験したA県の教員採用試験に現役合格し、卒業後に正採用されている。そして、もう1点は、新卒正採用であったのにも関わらず、3年間という短い期間で離職したということである。

対象者には「保健体育教師の早期離職プロセスに関するインタビュー調査」について、書面ならびに口頭で協力を依頼した。インタビュー調査において適切な対話を実施するための条件として、調査者と対象者の間にラポール（保坂ほか、2020）が形成されていることが挙げられる。N氏と筆頭著者は、かつてC大学の大学生と大学院生の間柄であり、N氏の進路相談についてたびたび会話する関係であった。よって、N氏は本研究の対象者として妥当であると判断した。また、筆頭著者は修士（教育学）の学位を有しており、中学校および高等学校において進路選択に関する講演会講師を複数回経験した実績を持つ。よって、筆頭著者はインタビューの聞き手として妥当であると判断した。以下、対象者のプロフィールを示した。

A県出身。B高校卒業後、1年の浪人期間を経てC大学に入学。学生時代にA県教員採用試験に合格後高等学校にて勤務。3年間の在職期間を務めたのち離職。現在は会社経営者。

2. インタビューの手続き

1) 事前アンケートの実施

インタビュー調査の1週間程前に、対象者に対しインタビュー調査内容に関する自由記述形式のアンケートを実施した。アンケートはメールで送信し、回答しにくい質問に関しては適宜電話およびメールにて質問してもらった。インタビュー調査時にはこのアンケートを補助資料として用いた(會田、2008)。本研究では対象者の教員志望動機、正採用に至るまでのプロセス、採用後に離職するまでのプロセスを詳細に聞き出す必要がある。そこでアンケート項目については、スポーツ系学部教職課程に勤務する共同著者とともに検討した。その結果、質問の内容として「小中高での生活史」「大学入学から卒業に至るまでの教職に関する出来事や教職に対する印象の変化」「正採用から離職に至るまでの経緯や心境の変化」を設定した。

2) 予備インタビュー

インタビュー調査は、初学者が安易に実施できる研究手法でなく、先入観に囚われず、かつ語り手のリズムを妨げないような工夫が必要とされる。そこで本研究の本調査に先立ち、筆頭著者と共同著者の2名で、N氏と類似した経験を持つ研究協力者に予備インタビューを依頼した。予備インタビューは、20XX年6月1日、Covid-19の影響も考慮し、Zoom meetingを用いてオンライン形式で実施した。予備インタビュー後は質問の仕方が適切であったか、臨機応変な対応はできていたかなどを振り返りながら、本調査に向けた準備を行なった。具体的には、質問内容を大まかにメモしたインタビューガイドを作成した。

3) インタビュー調査

インタビューは2021年6月5日、予備インタビューと同様にZoom meetingを用いて実施した。インタビューの冒頭には、研究に関する倫理的配慮について、画面共有機能を用いて関係書類を見せながら口頭で説明した。その際、インタビューを全て録画すること、本人の意思でどの段階においても研究に対する協力を拒否できること、研究成果を個人が特定できないよう十分に配慮し無記名で公表することを伝え、インターネット上の同意書に署名(入力)をしてもらった。インタビューは、事前に作成したインタビューガイドに沿って半構造化インタビュー形式で実施した。

3. 分析の手続き

1) 基礎資料の作成

まずは、録画映像を再生しながら、インタビュー参加者全員(筆頭著者、共同著者、N氏)の全ての発言をWordデータとして起こし、逐語録を作成した。次に逐語録を熟読し、標準化

アプローチ（白水、2016）を行なった。すなわち、言い間違いやわかりにくい表現の修正とともに、余分だと思われる感嘆詞などを適宜削除し、読者に内容が伝わりやすい文章に編集した。さらに、同じテーマであると思われる発言ごとに、文脈を崩さないよう意味固まりとしてまとめた。これらの作業は筆頭著者が行なった。この文書について、対象者にメンバーチェック（勝野、2003）を依頼し、発言の主旨と異なる内容がないかどうかを確認してもらった。その結果、加筆修正箇所は無かった。よって研究データとしての妥当性が確認されたため、この文書を本研究の基礎資料とした。

2) テクストの作成

基礎資料を熟読し、本研究の主題である“保健体育教師であるN氏が早期離職に至るまでのプロセス”に関係する箇所を抜粋した。そして、「教師を志した背景」「着任から離職まで」「在職時を振り返って」の3つのサブテーマに分類し、テキストとしてまとめた。その際、基礎資料からテキストが恣意的に変換されていないか、また適切な箇所を抜粋しまとめられているかを確認するため、共同研究者2名とトライアングレーション（岡村、2004）を実施した。この作業によって、可能な限りテキストの信頼性（小倉、2011）を高めた。

3) テクストの提示および考察の観点

テキストの提示については、3つのサブテーマごとに筆者の解釈を間に組み込む「二重奏形式」（小林、2000）を採用した。そして、テキスト全体を熟読し、教師観の変容や早期離職の要因に着目しながら考察した。

Ⅲ. 事例の提示

本章では、テキストを「1. 教師を志した背景、2. 着任から離職まで、3. 在職時を振り返って」の3つに分けて、それぞれのテキストについて筆者の解釈を付け加えた。なお、括弧内は筆者の補足である。

1. 教師を志した背景

教師になりたいと思ったきっかけというのは（特に）なくて、単純にサッカーを続けるにはどうしたらいいかっていうところから逆算しました。本格的に（サッカーを）始めたのは中学校1年生からで、大学を卒業するまでやっていたので、期間としては10年間です。（教師を選んだ）理由が3つあって、まず1つ目は、自分が生活するうえで、ある程度の所得を担保できる職業だからです。2つ目は、クラブチームでの指導ではなくて学校現場での指導に価値を置いたからです。まあ、これは大きな理由としては人間性の指導ができるから、ですね。3つ目

が、結局1つ目にも絡むんですけど、安定してサッカーを教えられるんじゃないかと思ったからですね。(安定して教えられるというのは)くびがないということですね。

私はA県立B高等学校を卒業して浪人しました。浪人中は何かしらサッカーに関わりたという思いはありました。その中で選択肢として出たのは、スポーツドクターになるか、スポーツ企業に勤めるか、教員になるか。この3つですね。スポーツドクターは結局医学部に行かないといけないので、学力的に間に合わないということがわかりました。うちは(実家の状況を考えると)私立が難しく国公立のみ(進学可能)なので、ちょっと学力的金銭的に無理という判断ですね。なので、選択肢として3つあったんですけど、実質2つという形です。大学(を決めた理由)も結論から言うとそこを受けるしかなかったという状況です。1年間学習した結果、センター試験は十分間に合ったんですけど、二次(試験)は間に合わないという状況でした。まだ体力的には自信があったので、実技試験で通る(=試験に受かる)、電車を通える距離を考えて、C大学(教育学部)体育(学科)っていう学科を受験した形になります。(教職への思いは)漠然とはあったんですが、固い意志は特になかったですね。

大学の授業について詳細を話すと、1年生のときはほとんど出ていないはずですが、D先生からも「お前このままだと留年するぞ」って言われたくらい多分受けてなかったはずですね。

大学受験のそこ(=志望校の決定)に意思がなかったんです。中学校1年生から高校3年生まで続けたサッカーというのは、自分でわざわざ強豪のクラブチーム、強豪の高校を選んでいったのもものすごくやる気もあったし、全力で集中できたんですけど、結局、大学選びでそこ(=C大学)しかないという選択肢を取ってしまいました。すべてに関して前向きではなかったというか、こんなはずじゃないっていう事実があったので、1年生のときはなかなか大学に足は進まなかったですね。(そのときは)普通に家でずっと寝てるか、ゲームしていました。大学の部活も1年生のときはまともに出てなかったですね。(教職への思いは)大学1年生のときは強くはなかったですね。

2年生になった時に1つターニングポイントがありました。D先生が大学の教授を目指してみないかと話してくれて。ただ、そのためには授業もしっかり出て、部活動にもしっかり出る。なおかつ成績は1番優秀なものを取るという条件が出たので、勉強し始めるきっかけにはなりました。ただ、教採(=教員採用試験)の勉強をするかと言われたらそうではないですね。大学の教員だったら(なってみたい)という選択肢が1つ見えた感じではあります。大学の教員って、好きなことしかしていないイメージでした。羨ましいなと純粋に思いましたね。大学の教員ちょっと魅力的だなって思いました。

大学の3年くらいからは英語の論文(を読んだり)とか、測定(したり)とか、大学院の先輩の研究とか手伝ったりして今後自分がどういう活動をしていくのか指針を立てる(=ような活動)のと勉強はしていましたね。(教師に)なろうというよりは、ナイキかアディダスに勤

めたってなった時に、そもそもその当時外資系という言葉さえも知らなくて。サイト開いたら新卒採用なんてほほないわけですよ。そもそも現地採用なので、ナイキのあるアメリカに行って、そのつての大学を出て、という流れがわかりそれ（ナイキかアディダスに勤めるという選択肢）もなくなりました。そこでなんとなく描いていた大学教員か高校教員（になろうかな）ってなった時に、D先生から「（採用試験を）試しに受けてみる」って言われたんです。

勉強は嫌いではないので、やるならちゃんとやろうかなということで受けました。（採用試験は）補欠合格で。なんとか合格することができたという形ですね。（補欠だったので）2次（試験）もどうせ受からないだろうと思って、面接の準備もせず。舐めてたわけじゃないですけど、リラックスしていったのが結果的に良かったのかなと思います。（合格通知を受けて）「あ、受かってる」のこの感じだけでしたね。周りはずごい褒めてはくれましたね。C大学からA県の保健体育（の採用試験）に受かるなんてことは今までなかったの。指導員の先生方からも「いや、C大学から（採用試験に）受かるなんて聞いたことない」って言われるくらい珍しかったらしく、みんなから「すごいよかった」と言ってもらえましたね。

（採用試験合格後は）本当は大学院を受験する予定だったんですけどD先生からも「一発で受かるなんてもうほほないからそっちに行きなさい（=A県高校教師になりなさい）」っていうアドバイスももらい、そこまで言われるのであればって感じだったので決めました。（教師になると決めるとき）漠然と好きなことはずっとできそうだなと思いました。自分の生活の10になるか1になるかわからないけど、サッカーを続ける、サッカーに携われる、という好きなことはできるというイメージですね。すごい前向きな気持ちではありましたね。教員嫌だとかそんなマイナスはなかったの。「教師になれる」「サッカー教えられる」っていうすごい前向きな気持ちではありましたね。もう全然ポジティブでしたね。

〈解釈〉

対象者のNはサッカーというスポーツにのめり込み「自分でわざわざ強豪のクラブチーム、強豪の高校」を所属、進学先として選択するほどサッカーが好きであった。そこで「サッカーを続けるにはどうしたらいいかっていうところから逆算」した結果、教師という選択肢が浮かび上がってくる。いくつかの選択肢がある中で教師を選択した理由の1つに給与面においても公務員という立場において「安定してサッカーを教えられるんじゃないか」というものがある。Nの場合、この時点で運動部活動指導者という側面を強く抱き、教師という職業は現実的かつ安定的であり、教師を志すという選択は手段的なものだったと考えられる。Nは浪人を経験している際、（教師への思いは）「漠然とはあったんですけど、固い意志は特になかった」と発言していることから、教師に対しての高い志望動機はこの時点で持っていなかった。

本格的に教師を目指したきっかけの1つに、指導教官Dとの関係性がある。指導教官Dと接する中で「大学教員って魅力的だな」と感じることもあり、教師という選択肢が少し現実感を

増してきている。これは外資系の企業に勤めたいという思いを抱きつつも、現状を考えて断念したという経緯もあり、教師という選択肢がより強くなったという側面もある。高校教師を目指すことになったきっかけとして、指導教官Dの「(採用試験を) 試しに受けてみる」という助言があったことが大きく、「勉強は嫌いではないので、やるならちゃんとやろうかな」という考えで採用試験に臨んでいる。対象者のNはサッカーを教えるという希望を抱いているものの、どうしても教師になりたいというような強い志望動機というわけではなく、複数あるうちの選択肢の1つであった。最終的には指導教官Dの「一発で受かるなんてもうほぼないからそっちに行きなさい」とアドバイスもらったことが決め手となり高校教師になると決断している。

2. 着任から離職まで

1) 着任時の心境

めちゃめちゃ充実してましたよ。最高に楽しかったですね。高校生って会話ができるじゃないですか。やっぱり(教師の) 楽しさは大人になる前の子どもたちと意見交換ができるっていうことですね。(成長の中で) 急激に良くもなり、悪くもなりそうな彼らに関われるというのはすごい良かったですね。(サッカーに関して) 良かったことは、行ったところ(の学校) が強くなかったんですよ。それこそ、地区大会1回戦で負けるとかだったんですけど、県大会まで行けたのが1番印象的でしたね。指導者として良かったというよりは、僕も勘違いしないように努めていたんですけど、子どもたちががんばってくれたなというのがあります。それはすごい良かったと思いますね。

(サッカー指導者として) 教員2年目に2週間、ドイツに留学したんですよ。そのときに思ったのは、サッカーを教える環境が違いすぎる(ということですよ)。(ドイツには) 部活動という概念がなくてサッカーを教える環境です。いまとなってはよくなかったなと思ったんですけど、高校の教員はサッカーを教えるところではなくて、高校の体育の先生をやる場所だっという悟りを開きましたね。(高校部活動のサッカーは) 予算が決められていて、その予算内でやることをやって。彼らの目標はサッカー選手になることとか、人間性を磨くことではなくて、進学することなので。ドイツのサッカーは(クラブでのプレイを通して) 人間性を身につけてサッカー選手としても一流になる。やっぱりドイツって別に部活じゃなくて、あくまでも活動なんですよ、地域が支えている。だから地域に1つスポーツセンターがちゃんとあって、芝のグラウンドもある。なんか高校(部活動でのサッカー) はそういう場所じゃないなってところに気づいた。っていうところですね。(ドイツに行って考え方の部分で) 自分が違ったんだなってことに気づいた感じですね。(生徒への対応は) 2週間じゃ正直変わらないですね。あとはなんかそんなに大きな効果はなかったですかね。

2) 離職に至った背景

1つ目が自分がイメージしてたものとのギャップですね。そのギャップが大人の事情というか、具体的にいうと予算ですね。「うん？」と思ったのは、これは教員を辞めるきっかけの1つでもあるんですけど、部活動って実は自由ではなくて、(学校内で) 予算が振り分けられてる。これは大会成績ではなくて、年配の先生でかつ権力がある方たち (=部活動指導者の顧問) がある程度の金額をもらえるのと、競技別で金額がある程度差別があるっていうところは納得はしなかったですね。サッカー(部)のほうが(大会)成績はよかったです。(子どもたちの取り組む)本気度は一緒だと思っているので。そこを大人の事情で優劣があるのはおかしいかなとは思ってましたね。そこはフェアに金額割こうよって。スポーツ自体は好きだけど、結局(スポーツの)仕組みが良くないというか。(予算や仕組みの問題は)大人の汚い世界ですけど、それを子どもに持ってくるなよって思ってたね。自分が続けたいサッカーに対しての予算というのはこのぐらいで、結局お金の問題にあたる。それが大人の事情で、サッカーは続けられるけれども、理想的な状態にはならないっていうのがわかった、というところが1点目ですね。

2つ目は、進学に関するところですよ。要は子どもたちの進学先を決めるのは親ではなくて実は教師っていうのがわかって。僕が赴任したところはちょっとでも成績がある子は大学に無理やり入れるっていうことでした。印象的なエピソードでいうと学年1位の子が「パティシエになりたい」って言ったんですよ。そうすると学年の先生たちは(進学を促して)その夢をつぶしにかかるわけですね。

(進路指導に関しては)僕は行きたいところ(=進学、進路先)に行ったらいいって常に言っていましたね。ただ、これも(生徒にとって)いいかはわかりませんね。結局いい大学に行った方が保険が利いたかもしれないので、僕の行きたいところに行け(という指導)も(生徒にとって本当に)いいかはわからないんですけど、やりたいことはやったほうがいいんじゃないかなと思って言っていましたね。

(当時の)クラスに結構重めのADHDを持った障がい者がいたんです。常時、だるい(=無気力、だるそうにしている)っていう感じです。端的に話すと、彼の進路をこちら側で強制的に決めるっていう形です。ご両親を毎回呼んで「学校続けられるんですか」っていうプレッシャーをかけ続けて(いました)。僕はそれを見た時にも「ちょっとなんかこれは違う」と思いました。なので、辞める(=離職を決意した)エピソードとして、自分が(イメージとして)持ってた学校を続けるうえでしんどい(=困難)子に対してのフォローアップ、バックアップが大人の事情で全くないという状況を見た時に、これは(=教師という仕事)ずっと続ける仕事じゃないなと思っていましたね。僕がしたい指導は多分学校内には存在しないじゃないかなっていうところ。それが1番大きな出来事ですね。

(離職を考え始めた理由の) 3つ目は教員がクビになるってのを見た時に、自分がどれだけがんばっても、誰かひとりがそういうこと (=世間の評判を落とすような行い) をするだけで自分も同じように世間からみられる。それは自分の努力ではどうしようもない。というのが大きく影響していますね。

3) 離職を決意して

(離職を決めたのは) 教員 3 年目の12月とかだった気がします。(離職を決意して) 心境として1番最初に(頭に) あったのは、いつ生徒たちに言うかっていうタイミングですね。そればかり考えていましたね。僕、教員(同僚)の人たちにはぎりぎりまで言わなかったんですよ。3月ぐらいに「なんかN先生来年度の準備全然しないな」みたいな感じになって一瞬でうわさで広まるんですけど、子どもたちにはいつ言おうかずっと考えていましたね。

(子どもたちへの対応は) 逆に変えないように努めてました。なんか変にかっこいいこととか言うとか考えずに、いつも通りにしてました。(子どもたちには) 普通に「教員を辞めます。僕は3年間で教員を辞めて、新しく挑戦をするから、君たちも挑戦することを辞めないように」というかたちの言葉は伝えました。

高校生たちって頭がいいので、「教員やめる、公務員やめるやつなんてこの世にいない」って思っていたので、いいリアクションしてくれましたね。みんなびっくりみたいな。言葉を失っていました。こんなやついるんだって。(大きな反響は) その場では返ってこなかったですけど、最後の日に寄せ書きみたいなものくれて、その中で「こういう選択をする大人が目の前にいて、自分の選択肢が増えたので良かったです」というコメントがいくつかあったのは良かったと思いました。

(離職を決めてからは) わくわくのほうが大きかったですね、これも。不安はなかったですね。あんまりネガティブに考えたことはなかったです。(ネガティブには) 全然ならなかったですね。

(離職したときの心境として) 解放された感がありましたね。大人のしがらみから解放された感がありました。

〈解釈〉

Nは赴任した学校でサッカー部に携わり指導を開始する。運動部活動指導者としてすぐに結果を残し、地区大会初戦敗退のチームを県大会出場までに導く。当時を振り返り「すごいよかった」と話していることから、チームの成長と結果に対する自身の取り組みに対してもある程度の手ごたえを感じていたことがわかる。また個人的にサッカーをするためにドイツに2週間の留学をしている。自身を成長させるためにドイツでのサッカー経験という自己投資をしていることからサッカーへの情熱は冷めておらず、運動部活動指導者として自身の研鑽を積んでい

たことがわかる。しかしながら、帰国後の自身の変化としては、多くはサッカーを取り巻く環境について語られており、サッカーをプレイし、学ぶために渡欧したにもかかわらず、プレイ以外の部分で大きな刺激を受けたことがうかがえる。特にドイツと日本のサッカーを取り巻く環境について「高校の教員はサッカーを教えるところではなく、高校の体育の先生をやるところ」「(高校部活動は)サッカー選手になることとか、人間性を磨くことではなく進学すること」と話しており「ドイツは部活動じゃなくて、あくまでも(地域が支えている)活動」というドイツのスポーツ文化と日本の学校教育における部活動の違いを強く認識している。このドイツへの留学を機に、サッカーを教えるという運動部活動指導者としてよりも、教育現場に立つ一教師としての側面が強くなってきていることがわかる。サッカーを指導するにあたり、学校部活動を取り巻く環境や予算面などの一種の限界のようなものや、体育教師としての役割を強く認識することが離職に至るまでのプロセスの中で重要な気づきになったと考えられる。

進路指導に関してもNは担当した生徒の進路決定の際に自身の考えと大きなずれがあったとしている。生徒の希望する進路に進もうとするところを(教師が)「夢をつぶしにかかる」時があるとして「子どもたちの進学先を決めるのは親ではなく実は教師」だと言っている。また学校生活を送ることに多少問題を抱えているADHDの障がいを持った生徒に対して、教師が生徒の両親に対して「プレッシャーをかけ」るような状況を修正することができなかったと話している。これらの例でNとしては「納得はいくかたち」を目指して進路指導していたが「こちら側で強制的に決めるというかたち」や、「学校を続けることがしんどい(=困難)子に対してのフォローアップ、バックアップが大人の事情で全くない」という現状に「僕がしたい指導は多分学校内には存在しない」と考えるようになった。N自身としては進路に関して生徒自身が意志を持ち、決定していくという過程を後押ししたいという気持ちがありながらも、生徒の進路決定に際し、同僚教師のアプローチや理想とのギャップを感じたことで「ずっと続ける仕事じゃない」と違和感を覚えたことが離職のきっかけになっている。これは、自身が理想とすることや、やりたいことを中心に考えて教師という道を選択したが、教師として職務を続ける中で、考えの主体が「自分のやりたいこと」から「子どもたちのためになること」に変化が起きていると考えられる。サッカーの指導や進路指導に関しても、「子どもたち」が考えの中心に変化しており、それに伴う自身との葛藤が最終的な離職の原因になったと考えられる。

3. 在職時を振り返って

(サッカーをしていたら)サッカーを教えることが好きということに徐々にシフトして、(サッカーを)教えるとなったら教える側の人間的なベースを作らないといけないというところに気づいて、そうすると次は教育が好きになってくる。(次第に)教育にシフトしていくので、結局、入り口はサッカーだったけど、辞める出口は教育観のずれですね。教育の技術的なことではな

くて、人間的なところやベースを教えると（サッカーの）技術も上がるということに気づいたので、そこは結構ポイントだったなと思います。

自分の教育観としては、（進路について）やっぱり教員のできるこって少ないので、ほぼ親と環境が人生を決めるとは思ってますね。（僕の考えは）材料は与えてあげるから、あとは好きなものを取って料理してね（という感じで）、要は、自分で選択してねということなので、何かこう教育で人間を劇的に変えたいとかっていう根本はないので、できることは少ないなっという回答になったかなと思います。人間を変えたいとか、そういう脳みそ（＝知識）があったら、こんなこともできた（＝可能性が広がった）っていう発想になったかもしれないですけど、なんか自分がやってたのは常に材料だけ与えていたという感じなので。（人生は）出会いと環境でほぼ決まるのではないかなと思ってます。出会いは自分でコントロールできますが、環境ってすごくコントロールしづらいものなので。教員が非力だとは思わないですが、影響の要素としてはそんなに大きくないかもしれないと思いました。

（部活動指導者としての子どもたちへの影響は）あまりないと思っています。教員の教える能力がすごい高かったとしても、受ける側の理解力とパフォーマンスが比例していないと、ミスマッチ起きるなって思っていて、そこはがんばればどうにかなるとは思ってないです。言われたことを体現できるそもそものスキルと、言葉を理解できる能力がないと、教えてもらう意味ってないと思っています。まして、期間が3年間って決まってるので、（影響力は）半分ないというのが答えですね、僕の中では。

（教員の3年間は）すごい良かったです。（民間のいまと）どっちも甲乙つけがたくて、教員の3年間も最高だったなって思ってます。この3年間はなかったらいまの僕はないので。少し規模が大きくなるんですけど、子どもの問題は常に大人の問題ってことに気づけた。大人が変われば、子どもが変わるっていうことに気づかせてくれたので、僕は民間企業で成果を出して、自分が仕組みを作れる側に回ろうと思ったというところで、すごい良かったなと思います。母校の高校には本当に会社が大きくなったらスポンサーやらせてくださいってずっと言ってます。

〈解釈〉

「（サッカーをしていたら）サッカーを教えることが好きということに徐々にシフトして、（サッカーを）教えるとなったら教える側の人間的なベースを作らないといけないというところに気づいて、そうなる次は（次第に）教育が好きになってくる」という発言からもNの内面で運動部活動指導者という側面から教育者への変容が起きている。

Nは離職してしまったが、教師という仕事についてのネガティブな思いはなく、「教員の3年間も最高だった」と振り返っていることから、教師になったという経験が現在のN自身にとってプラスに働いていることがわかる。立場は違えど、「子どもたち」や「教育」に関する興味

関心は低くなく、元々教師になるきっかけにもなったサッカーと関連させて考えていることから、教育そのものへの熱量は高いと考えられる。

IV. 考察

1. 教師像の変容

対象者のNは、どうしても教師になりたいというような強い志望動機があったというよりも、むしろいくつかの選択肢の1つであった教師という仕事に就いた。指導教官Dの助言で採用試験に臨み合格するが、その時のNの発言として「『あ、受かってる』のこの感じだけでしたね」とあり「そこまで言われるのであればっていう感じ」で教師になることを決断している。松井・柴田（2008）によると教師の進路決定プロセスには、教師のほかにもいくつか就きたい職業があったが、最終的には自分の意志で選択し教職に就いたという「直前変更型」と、どの職業に就きたいか自分自身の希望が不明確なまま、なりゆきで教員採用試験を受験したら合格したのでそのまま教職に就いたという「なりゆき型」がある。これらのことを合わせると、Nは教員採用試験合格時に大きな喜びを感じたというよりも淡々と事実を受け入れた様子がうかがえるため「直前変更型」と「なりゆき型」の両方の特徴を持っていたと考えられる。

入職前の段階では「好きなことができる」と感じていたことから「運動部活動指導者」という側面が強かったと推察できる。しかしながら、在職中に生じたサッカー指導の実態と、進路指導等における自身の考え方との違いに違和感を覚えるようになる。Nの発言から読み取れるものとして、教師になる前は発言の主体の多くがN自身だったのに対して、在職中を振り返っていると発言の主体が「子どもたち」になっている。コーチングの現場では伊藤（アスリートセンタードコーチング、online）や荒木（2017）がアスリートセンタードという「指導者は選手自らが学ぼうとする環境を整えることに注力し成長を促すという考え」を提唱し、アスリートを中心に考えていこうという認識が広まりつつある。Nは「大人の事情」と多く表現していたが、子どもたちにとって何が最適で何が子どもたちのためになるのかという基準で考え出していることから、Nの考えの中心は「子どもたち」になっている。N自身も子どもたちを中心に教育を考えたときにぶつかる「お金」や「進路選択」という点で葛藤を抱え、特に進路指導に関して、北神（2002）によれば本来ならば「一人ひとりの子どもの個性・多様性やニーズに応じてそれぞれの個別の生き方に直接関与していくことが求められる」が、Nの「ちょっとなんかこれは違う」という発言から、現場での同僚教師の考え方や子どもへの接し方にN自身が教師として思い描いていたものとのギャップを感じていたことがわかる。N自身がサッカーを続けながら「やりたかったことができないという状況」ではなく、指導のなかでの「子どもたちのためならない状況」というものにストレスを感じていた。「サッカーを続けるために」教師になるという選択をした「運動部活動指導者的」教師像が、実際に教師という職に就き子ど

もたちと接していくことで、自分主体の考え方から子どもたち主体の考え方へ変化を起こしたと言える。「入り口はサッカーだったけど、辞める出口は教育観のずれ」という発言からもN自身の教師像が変容していることがわかる。

須甲・四方田（2013）は「運動部活動指導者としての教師観から授業者としての教師観を形成するに至ったのかという視点で～肯定的・縦断的側面から検討する必要がある」として課題をあげていた。今回のNを対象にした調査はそれに類似するものであった。教師を目指したきっかけから離職までのプロセスの中で運動部活動指導者からの教師像の転換があり、自身でも気づけなかった潜在している教師像の明確化につながった可能性も示唆される。Nは離職してしまっただが、多忙や精神的疲弊による離職ではなく、教師像の変容に伴う新たな教育への携わり方を模索する「発想転換型」による離職によるものと考えられる。

2. 教師の持つ成長機会について

Nは大学進学及び教員採用試験合格後の進路決定において、自身が強く望んだものではなく、消去法や指導教官からの助言があり最終的に決定していた経緯があるが、教師として子どもたちに接する中では主体的な判断を促すような発言をしている。糸岡（2002）は教師自身の成長は生涯にわたって学び続けなければならない教師という職業において不可欠であるとし、小島（2002）は「教師（教職）という職業をもったことによって成り立つ職業的自立」によって人間的成長が図られるとしている。以上の観点から、N自身が教師となり、初めて得られる機会を通して成長していく過程による、主体性を持って物事をとらえ決断していくという考え方の変化があり、その考えを関わる子どもたちに促していることと推測できる。すなわち教師として子どもたちに接する中で育まれるN自身の教育観の変容は、教師としての成長の1つと捉えることができる。最終的に自分のやりたいことの実現可能性が低いということで教師を辞めるという判断をしているが、教師として成長していく過程で、自分らしい教育への携わり方を模索した結果離職に至ったのではないかと考えられる。

V. 結論

本研究では、教師となったが早期離職した事例をもとに、保健体育教師のキャリア初期における離職プロセスに関して考察した結果、以下のような知見を得られた。

1. 運動部活動指導者的側面を強く持っていた教師像から、運動部活動指導ではなく教育的側面に違和感を覚えるなど、教育の在り方そのものへの心境の変化が見られた。教師像が変容していく過程において自身との教育観のずれを認識した結果「発想転換型」の離職に至った。

2. 教師像の変容に伴う教育観の変容は教師自身の経験蓄積に伴う成長過程において自然なものである。教師となってからでしかわからないことも多く存在するなかで、離職という決断

をすることも教師自身の成長の1つと捉えることができる。

VI. 今後の課題

本研究で得られた知のように、厳密に言うとは本人にしか当てはまらないとされるような知であっても、類似する事象を読者の中で結び付け、読者自身が新たな知見を得たり考え方の幅が広がったり、他者の学びに役立てられるような知として提示することができればその意義は大きいだろう。(會田、2012) 今後は「早期志望型」で教師となった事例も含めて、様々な教師像を持って入職し早期離職した事例を対象とした研究を行なうことで、教師の早期離職を防ぎ教育の質を上げていくことにつながると考えられる。

文献

- 會田宏 (2008) ハンドボールのシュート局面における個人戦術の実践知に関する質的研究：国際レベルで活躍したゴールキーパーとシューターの語りを手がかりに. 体育学研究, 53 : 61-74.
- 會田宏 (2012) トレーニング科学において事例を研究する手続き—球技における実践知を対象とした質的研究を手がかりに—. トレーニング科学, Vol24 : No1.
- 新井肇 (2007) 教師のバーンアウトの理解と援助. 広島大学大学院心理臨床教育センター紀要, 第6巻 : 23-26.
- 荒木香織 (2013) 真のアスリート・ファーストコーチングを目指して. 日本体育学会第68回予稿集 : 33-3.
- 平尾実美 (2020) 学校教員の疲弊構造を探る—離職経験者の語りからの一考察—. 公教育システム研究 19 : 25-49.
- 保坂亨, 中澤潤., 大野木裕明 (2000) 心理学マニュアル 面接法. 北大路書房, P97.
- 糸岡夕里 (2020) 新版体育科教育学入門 高橋健夫編. 体育授業で求められる教師の能力. 大修館書店, pp.251-256.
- 伊藤雅充 (2011) アスリートセンタードコーチング. <https://www.nittai.ac.jp/coaching/>. (2021年6月23日にアクセス)
- JTB Benefit (2021-02-18) 若者の離職率は入社3年以内で3割以上. 詳しい現状は?. <https://jtb-hrsolution.jp/hrsupplement/health/40>. (2021年5月25日にアクセス)
- 勝野とわ子 (2003) 看護学領域における質的研究方法について. 広島大学保健学ジャーナル : no1.
- 北神正行 (2002) 教師の条件 授業と学校をつくる力. 小島弘道編. 教職への道. 学文社, pp.7-8.
- 小橋繁男 (2012a) 小中学校教師のストレスとバーンアウト離職意思との関係. 日本保健科学学会誌 15巻 : 4号.
- 小橋繁男 (2012b) 小中学校教師の離職意思と離職への影響因子に関する検討. 学校メンタルヘルス : Vol15, No2 : pp.278-285.
- 小林多寿子 (2000) 「二人のオーサー」好井裕明・桜井厚編『フィールドワークの経験』. せりか書房, pp.101 - 114.
- 小島弘道 (2002) 教師の条件 授業と学校をつくる力. 小島弘道編. 学文社, pp.185-187.
- 草海由香里 (2014) 公立小・中学校教師の休職・退職意識に影響を及ぼす諸要因の検討. パーソナリティ研究第23, 第2号 : 67-79.
- 松井賢二, 柴田雅子 (2008) 教師の進路決定プロセスと職業的アイデンティティとの関連. 新潟大学教育

- 学部附属教育実践総合センター研究紀要, 教育実践総合研究: 第 7 卷.
- 文部科学省 (2020) 平成 30 年度公立学校教員採用選考試験の実施状況について. https://www.mext.go.jp/content/20191226_mxt_kyoikujinzai01_100002845_11.pdf (2021 年 5 月 25 日にアクセス)
- 文部科学省 (2020) 令和元年度公立学校教職員の人事行政状況調査について. https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/jinji/1411820_00002.htm (2021 年 5 月 25 日にアクセス)
- 小倉康嗣 (2011) ライフストーリー研究はどんな知をもたらし, 人間と社会にどんな働きかけをするのか—ライフストーリーの知の生成性と調査表現—. 日本オーラル・ヒストリー研究, 7: 137-155.
- 岡村純 (2004) 質的研究の看護学領域への展開—社会調査方法論の視点から—. 沖縄県立看護大学紀要, 第 5 号: 3-15.
- 迫田裕子, 大竹晋, 西山久子, 納富恵子, 花島秀樹, 谷友雄, 森保之 (2011) 教師のキャリア形成と意欲的な教師育成を目指す大学・大学院の取り組みについて. 福岡教育大学紀要, 第 60 号, 第 4 冊: 201-214.
- 白水繁彦 (2016) 女性が「自立」するということ—ライフストーリーから読み解く高学歴女性の適応ストラテジー—. *Journal of Global Media Studies*, 17・18: 55-67.
- 須甲理生, 四方田健二 (2013) 体育教師が有する教師観に関する一考察—運動部活動指導者としての教師観から授業者としての教師観へ—. 日本女子体育大学紀要, 第 43 卷: 41-50.
- 脇本健弘 (2015) 教師の学びを科学する—データから見える若手の育成と熟達のモデル—. 中原淳編, 北大路書房, pp.10-12.